



## 精神看護学領域地域貢献活動報告：学術活動

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福島県立医科大学看護学部 公開日: 2017-04-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大川, 貴子, 田村, 達弥 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2000590">https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2000590</a>

## 学 術 活 動

## 精神看護学領域 地域貢献活動 報告

大川 貴子・田村 達弥

私たち精神看護学領域では地域貢献の一貫として、福島県内の看護職者向けに継続して行なっている活動があります。

一つ目は「セルフケア事例検討会」であり、臨床での困難事例についてセルフケア理論を基盤にして、ケースの全体像を捉えながら、どのようなアプローチをしていくのがよいか、ディスカッションしています。この事例検討会は、事例を提供して下さる施設へ向かい行って行なうという、出前形式で実施しています。

平成28年度は第39回を6月4日(土)に医療法人安積保養園 あさかホスピタルにて(参加者:56名)、第40回を9月24日(土)に公益財団法人金森和心会 針生ヶ丘病院にて(参加者:31名)、第41回を12月3日(土)に磐城済世会 舞子浜病院にて(参加者:24名)行ないました。

事例検討会の前にはミニレクチャーと称し、事例提供をする施設からの希望に添った内容で、30分程度の講義を行なっています。今年度はいずれの施設からもセルフケア理論についての理解を深めたいという要望があったため、セルフケアに焦点をあてたアセスメントや、それに基づくケアの導き方について具体例を挙げながら説明すると共に、パターンリズムへの問題提起や、リカバリー・ストレングスモデルとセルフケア理論との関連について触れました。ミニレクチャーに対する参加者からのアンケートでは「セルフケアは患者さんにしてあげるのではなく、自己決定できるように導くことが大切であることを改めて学びました。」「小さな親切、大きなお世話。身につまされる思いでした。私たち看護者が日頃

良かれと思って行なっていることが患者にとって自ら考え行動に移す能力を低下させてしまうことに気づかされた。」といった感想が寄せられました。

事例検討では、各施設の事例提供者とそのケースに関わる医療福祉メンバーにご協力いただきながら、参加者を交え、教員のファシリテートのもと、2時間程度かけて活発な意見交換が行なわれます。事例提供者からは「自分たちが行なっている看護について語ったり、意見をもらったりすることで患者本人や家族へのかかわり方について整理することができた。」「問題行動の中に隠れている患者の気持ちを全体像から理解していくことで、患者の行動の裏付けができ、何を求めているのか少しずつ見えてきたような気がしました。」といった感想が聞かれています。参加者からのアンケートでは「1つの場面からそのことの意味を考えることの重要性和、アセスメントをつなげていく思考のプロセスを学べた。」「ミニレクチャーの内容が参加者の意見に反映されていたように感じる。困難なケースに向き合っていく大変さを改めて感じ、提供者が支援される会になっていると感じた。」といった感想が寄せられました。

また、参加者からは毎回「また開催してほしい」「是非続けてほしい」といった意見が寄せられています。次年度も3回のセルフケア事例検討会を予定しております。

二つ目は「精神看護学セミナー」であり、毎年、精神看護において関心の高いトピックを取り上げ、そのテーマに関する第一人者や、研究活動を行なっている人をシンポジストに招き、シンポジストからのプレゼンテーションを踏まえて参加者とのディスカッションをするという形で開催しています。

前は平成28年3月5日(土)に、『あなたは「家族へのケア」をしていますか? -基本的な考え方から具体的なアプローチまで紹介します-』をテーマに、精神疾患患者の家族に対するアプローチに焦点を当てて、シンポジストを2名お招きして開催しました(参加者70名)。高知県立大学看護学部精神看護学教授の田井雅子先生からは、家族エンパワメントモデルについて紹介して頂きました。医療法人安積保養園あさかホスピタルの大森徹さんには、修士課程で行なった研究結果を基に、精神科



セルフケア事例検討会での様子(舞子浜病院)

急性期病棟に入院となった患者の家族が求めていることについて報告していただきました。ディスカッションでは、病棟や地域で実践されている参加者の方々からたくさんのご質問やご意見を頂き、家族エンパワメントモデルの精神看護への応用についてや、対応に苦慮している家族への支援方法についてなどを考え合うことができ、とても充実したセミナーとなりました。参加者からのアンケートでは「家族のニーズを捉える際に、自分の価値観から離れるということにハッとしました。」「今まで家族エンパワメントモデルというシステム化されているものがあるとは知らずに独自の考えや上司先輩の方法の見よう見まねで対処してきた。家族へのかかわり等の理論的なものを取り入れて行なえると感じた。」「ディスカッションがとても興味深いもので、自身のケアを考え直すことができた。どの科にも共通することなので、是非もっと多くの人に家族看護を広めていきたいです。」といった感想が寄せられました。

今年度は平成29年3月4日(土)に「グループのちからを再確認! -当事者同士が語り合える場づくり-」と題したセミナーを開催予定です。

大学に籍を置く者として、理論と研究と実践とのつながりを具現化させていけるような取り組みを展開し、そのことが県内で提供される精神看護の質を高めていくことに少しでも貢献できればという気持ちで、このような活動を行なってきました。「継続は力なり」という言葉を信じ、より多くの皆様とこのような場で意見交換をし、実践に活かしていただけるような「お土産」をもって職場に戻って頂けるよう、創意工夫をしながら会を重ねていきたいと思っております。



2015年度精神看護学セミナーの様子